

芸能—技術—手芸に大切な手に就て

中 村 ソ ノ

一、前 が き

人間には五感が働いている。視覚—聴覚—嗅覚—味覚—触覚、即ちこの五つがそれである。造物主の叡智はこれを人体に配するに、大きな顧慮を払われた。人体構成の上位より下位に向つて、その感度を順次繰り下げられた。即ち視覚（眼）最上位であるから、最も遠くを見ることが出来、聴覚（耳）はその次に位し、嗅覚（鼻）は数米先のものしか嗅げなく、味覚（舌）は舌上に乗せなければ味を判別せず、触覚（手）は触れてみなければ感ぜないと言う工合にせられた。

然し触覚は他の四覚が主として受動的であるのに反し、発動的渉外実行器管としての機能を与えられた。

あらゆる芸術—美術—工作は、頭脳の働きによる智力—創意を、その手によつて表現し実行されるのである。

言わば造型の主脳者である。故に芸術—技能者にとつては、手は最も大切なものであつて、その手の働きの巧拙によつて製作品の評価は決まる。それ程大事な手であるので、以下私の手に對する所感を述べてみようと思う。

二、手 の 使 命

芸能—技術—手芸に大切な手に就て

手は意志、人間の意欲―智力―感情を表現する実行器官である。然かもそれが主として造型に向つて働かされる。故に手と頭脳とは全く不離不即のものであつて、完全に二位一体とならなければならない。

世上往々眼高手低と称せられる人がある。それ等の人は頭脳と手が一体となつて働かないからであつて、如何なる高遠な理想を抱き卓絶した才能を持つていても、これを實現し得ないのは、その頭脳に相應する良き手を持たないからである。

然し世には天才と称せられる人も在る。その人が常識的には欠くる所があつても、その特技だけは完全に頭脳と手が一致しているから世人を驚かす傑作が出来るのである。

人間の手は人類の發展文化の向上に寄与している。否今日の文化は手によつて成されたと言つても過言でない。

元來手の使命は、頭脳―心の動きを直ちに実行に移す行動器官である。言葉を以て表現するような無形聴覚対象として作用するものでない。

実行器官であるだけに芸能―技術―手芸者にとつては、手は生命に次ぐ大切なものである。

絵画―音楽―彫刻―手芸等の作品演奏は、手の働きの巧拙によつてその評価が決まる。文学に於ても亦同様とも言ひ得る。

工芸―器具機械用品も亦総て手による産物である。手は唯に造型製産のみに働くのではなく、その示形―表現型示によつて愛情―親和―嫌避―憎惡―憤怒の感情を表現する。

元來人間とは社会的動物である。と先哲が喝破した如く、集團的生活を好みこれを為す者である。

集團的生活をより善くなす為には、愛と慈しみ協調の手を差し延べなければならぬ。大きな事業はこの理念の下に、個々の暖かい手が堅く結ばれねば成功しない。一家の安寧幸福も家族各人の手が一つとなつて結ばれねばならない。こうした意味から手を切る（断交）ことは、集團生活の精神に反する。

吾々は遠い悠久の昔から、祖先の手の働きによつて生活の改善向上せられ、これを継承し今日に至つたのである。であるから我々も亦無限に継ぐ子孫の為に、善い手を働かして遺産とし祖先の恩恵に報いなければならぬ。芸能―技術―手芸者は、特に手の働きに感謝し、手を勞り手を大切に、その向上修練に最大の顧慮を払わなければならない。

繰り返し言うようだが、人間の手は人間の意慾―智力の実行器官であるから、その手の働きが常に善意に向つて、社会を益し自己を幸にする面に動かすべきであつて、手の動きが社会の安寧秩序を亂し、自己を亡ぼす方向に動かしてはならない。

三、手の歴史

上述するように人間の手が今日のように重要な働きを為す迄には、幾千万年の時代を経過した。

元來人間が他の動物との差は、神が人間のみに与えられた自然制御力―即ち物慾があることである。

他の動物にはそれが無い。生命維持の食慾と種族繁殖の性慾とがあるだけである。

物慾とは名譽慾―財力慾―権力慾―創造慾―陶冶慾等の総てである。そうしてこの物慾を満して呉れるのは、人間の叡智をその儘具現せしめて呉れる手が在るからである。

然しこの人間の手と雖も、創生の時から今日のように優れたものではなかつた。人間が火を発見し火を利用し始めた太古から今日迄、倦まず撓まず修練向上し続けて来た成果であつて、今日では手は頭脳のより良き実行者となつた。そうして手は常に

生命なき自然に生命を与え

目的なき自然に目的を与え

価値なき自然に価値を与える

人間必須な働きをなすに至つた。而うして今日の文化を來したのである。

一片の石も集積されれば高層建築となり。無心の溪流も集積利用することによつて、幾万キロワットの電力を生み、熱が原動力化し利用宜ろしきを得なかつた頃には嗅み水として排斥された原油も、精製によつて近代生活に不可欠な石油―軽油となり、最近まで誰人にも顧みられなかつたウラニウム鉱石も一大発見によつて偉大な原子力を生ずる原料となつて利用され、価値なき一本の木も人間の手を加えれば景観絶賞の姿となる。

このような自然の制御を行うのは、人間の叡智の実行者―実行器管である手の働き、手の功蹟である。

人間の手の發達の順序は直立歩行から始まる。人間創生直後は他の動物のように、背柱水平歩行即ち四つ這いであつた。その時代は手即ち前肢は後肢と同様体重を支え、後肢と交互に運転して歩行したものである。それ

が直立歩行即ち背柱垂直になつてから、体重を支える必要がなくなり、手としての働きを専用出来ることになつた。今日吾々が歩行するに際し、無意識に手を交互に振るのは、当時の直立歩行の身体を倒れないようにする。バランスの遺風かも知れない。

否寧ろこれは逆説であつて、前肢を手として働かせる為めに、後肢に体重を支えしめ歩行を専用せしめたのかも知れない。何れにしても人間の向上は前肢後肢共発達した事による。

而うして二本の前肢が自由に活動するようになり、直立歩行の為に生理学上頭の安定度が高まり、大脳拡大を誘起し、智脳が発達し、その実行器管として手がこれに併行して発達し、握む握るの動作が鋭敏確實となり、指が巧妙に動き、提げる、摘む、搔く、指差すの働きが巧みになり、書き、描き、刻む、編むの技術を修め、遂には触覚によつて嫌避―憎悪―愛情―親和を判別し得るようになつた。

更に又、人間は他の動物のように、身を守る武器がないので、前肢である手は専ら対敵武器として使用されることになつた。初期は拳固をかためて敵対する。それがやがて人間の叡智と手の働きによつて、棒を握んで使用し、石を投げ飛ばして敵に当ることにになり、やがて劍―弓矢―鉄砲を使用する事に進み、今日では原子力をボタン一つ押すことによつて数千―数万の敵を破滅せしめ又大原動力発生の大なる発明をなすに至つた。

手の発達人間の進歩を如実に示すものであるから、その手によつて其の人の運命、禍福、適業、不適業をも判識する智識迄得るに至つた。そうして手相がその人の過去―現在―未来を、ある程度観識し得る古学が生れた。

吾々の手はある意味に於ては、自己を赤裸々にさらけ出すものである。

そうして吾々の手は永い歴史と、経験と修練によつて、初めて今日の手となつたのである。

四、手の表現

吾々の発声―音楽は意志の表現であるが、手も亦人間の意志を表現する。軍隊に於ける挙手は敬礼であるが、これを約束―規律と断じて了うことは早計である。手を挙げる動作は潜在的な無敵対の動作であつて、同時に相手方を敬服する意志表現である。

両手を挙げた場合は無抵抗の表現であり、両手をついた場合は謝罪を意味し、手を切ると言えば断交のことであり、手を握ると言えば協力盟約の誓いであり、握手は親愛―友情―融和の表現である。

合掌は無我敬神拜仏のみ証であり、拍手は礼讃―声援―合流の表現である。

掌を屈げて動かせば招くことになり、手を以て払い又は押し出せば排斥の行動であり、手を振り上ぐれば怒りを表わし、拳固を固めれば敵対の準備行動である。

双手を組み合せれば思案又はゆとりを示し、拇指を示せば親方―親を意味し、小指を示せば女性、配偶者、愛人のことであり、中指と人差指を並べて動かす型式によつて、囲碁、将棋を表現する。人さし指を曲げれば盗人の意味し、人の最も嫌避する処である。

斯くの如く手は無声―無言の意志表現をする。

現在の商取引に使用する、小切手―約手の如きも、手の実行確實を確約表現する証券である。

以上は主に手（指）の型示上の表現又はこれに類するものであるが、手が如何に働き労働に基準せられるかは、次の熟語によつても知ることができる。

妙手、奇手、上手と言えば優れたる価値を意味し。

人手、手隙き、手待ち、手空き、手一ぱい等は労働力の多寡を意味し。

手間、手数、等は仕事の複雑難易の単位ともなり。

手段、手法、手術、手芸は働きを区分し。

手勢、は少数ながら服心部下のことであり。

働き手、は勤労者のことである。

手を焼く、とは処置なく失敗のことであり。

手ぐせ悪い、は不正―不良―犯罪者を指し。

手のこもつた、と言えば複雑精巧の代名詞であるように、手即ち働きの器管を、連想する熟語は真に枚挙に遑がないのである。

故に手は無声無言の人間の意志表現である。

五、手の清浄とその功績

手は人間行動の最先端である。故に吾々の手は常に清浄でなければならない。吾々の手には常に家庭の平和幸

福、社会の安寧秩序がかかつている。

社会的動物と言われる人間は、その手の善用によつて、集団的生活が営なまれ、社会が平和で各人が幸福で、相ともに栄える。

それに反し各人の手が汚れ、手が悪用される時は、社会が乱れ各人が不幸になる。

吾々は人間の手のほんとうの使命を悟り、手を尊重せなければならぬ。

又せん細な仕事。手の働きによつて成される、芸能—美術—音楽—手芸等には、手を一層大切にせなければならぬ。その手は国家社会の手であるとの自負を以て、保護、修練せなければならぬ。その心掛けあつてこそ、初めて、優れたる絵画—卓絶したる音楽—精巧なる手芸品が生れるのである。

精巧な機械—深遠なる学理の下に構成せられる装置、六ヶ敷い方程式の下に処理せられる化学製品等は、何れもよき手によつて完成し又これを操作する技術者の手も亦正しく清浄でなければならぬ。

今日の文化は智能の実行者の手によつて成つた事実に想を致しその手の功績に感謝し満腔の敬意を払わねばならない。

六、結　　び

以上は人間の手に就て、私の所感の一端を披瀝したに過ぎない。想多くして却つて一貫せず真に遺憾とする処であるが、私は和裁—手芸の教育に携わる関係上、常に人間の手に多大の関心を持つてゐる。

手は働きの代名詞であつて、働くと言ふことは、その字義を示すように、人の為め、(人偏)に動くの意味であつて、吾れ人の為めに動けば、人亦吾の為に動く、それが働きであつて、友愛―同情―協力―繁栄はこの信念の在る処必ず起きるのである。

故に吾々の手は、常に正しく清らかに、然かも暖か味を以て社会に差し延ばさなければならぬ。それが社会的動物と言われる。人間の責務であり、私は常にそれを念願しつゝ、毎日を過している。(三三、一〇月)

(本学助教授、和裁、手芸)